

明治・大正・昭和初期における来日宣教師の 活動にみる生活洋風化への影響 — ビンフォード夫妻を中心にして —

川崎 衿子

(文教大学女子短期大学部)

原稿受付平成 10 年 9 月 28 日；原稿受理平成 11 年 7 月 23 日

Western Style of Dwelling Spread in Japan in Early 1900's through Christian Missionary Work

— The Case of Gurney and Elizabeth Binford —

Eriko KAWASAKI

Bunkyo University Women's College, Chigasaki 253-0007

As Japan opened the door to the rest of the world in the Meiji Era, the wave of westernization spread rapidly over many sectors of Japanese society. One of the most remarkable impacts it made was on the style of dwelling and here we find that the grassroots-level Christian missionary work in many parts of Japan played an important role. This report is a case study that focuses its attention on the missionary activities of Gurney and Elizabeth Binford. This missionary couple engaged in their preaching activities primarily in Ibaraki Prefecture during the period of 37 years, from the time of their arrival in 1899 until 1936 when they left Japan.

They opened up their home to the public to show what the Western style of living was like. They taught the local people not only the Western cooking and housekeeping but also the family management based on love and respect as well as pure life. Their activities attracted the attention of younger people, especially those young women who admired Western culture and were sensitive to new ways of thinking, prompting them to long for improvement in their dwelling life. It should be noted that the Western style of dwelling spread in the Japanese society, keeping pace with the modernization and democratization led by Christian spirits. In later years, the trend was carried on by the efforts of the female members of Omi Mission; it was in Omihachiman in Western Japan where dwelling life saw remarkable improvement.

(Received September 28, 1998; Accepted in revised form July 23, 1999)

Keywords: Western style of dwelling 洋風生活, dwelling life 住生活, missionary 宣教師, Gurney Binford ガーナー・ビンフォード, Elizabeth Binford エリザベス・ビンフォード.

1. はじめに

1859 (安政 6) 年 7 月, 日本は鎖国を解いた後, 神奈川, 長崎, 箱館 (現・函館) を開港することになった。これによってただちにアメリカのプロテスタント各教派は, 日本伝道の計画を開始した。同年中には, はやくも 6 人の宣教師が神奈川, 長崎に到着した¹⁾。この年をもってプロテスタント日本宣教元年といわれ, その後英米宣教師の来日は続いた¹⁾。

1893 (明治 26) 年には本報告の中心となるフレンド派のガーナー・ビンフォード (Gurney Binford) が来日, 伝道活動を開始した。フレンド派は, 一名クエーカーとも呼ばれ 17 世紀イギリスで起こったキリスト教の覚醒運動で, アメリカには 1657 年頃に伝わりペンシルバニア州フィラデルフィアはその拠点都市となった。日本には 1885 (明治 18) 年に最初の宣教師コサンド夫妻 (Joseph and Sarah Ann Cosand) によ

って伝えられ、キリスト友会と称されている。夫妻は東京・芝に普連土女学校（現普連土学園）を設立した。したがって同校は日本におけるフレンド派の中核となり今日に至っている。その後ガーナーは帰国するが1899（明治32）年、結婚したばかりの妻エリザベス（Elizabeth）を伴って再来日した。以来ビンフォード夫妻は1936（昭和11）年離日するまでの37年間各地でキリスト教伝道活動を広げた。夫を支えるかたわらエリザベスは若い女性の何人かを自宅におき、生活を共にしながら、キリストの教えに忠実な日々の行いと近代西洋の精神文化や西洋式家事などを教授したが、その中の1人に渡辺清野という女性がいた（図1）。

一方同じ頃、滋賀県近江八幡ではウィリアム・メルル・ヴォーリズ*²（William Merrell Vories）が自らの教団近江ミッションを率いて伝道と事業の両面において大きな成果を上げていた。来日以来のヴォーリズの成功の背後には常に吉田悦蔵*³がいた。悦蔵はヴォーリズの教え子であったが、22歳のとき最初の留学をし、ニューヨークの聖書学校に通ったが、おりしもそこには休暇をとって帰国中のガーナーの姿があった。その後彼らの交友は続き、やがては悦蔵と清野の結婚に結びつくこととなった。結婚後清野は近江八幡で洋風の生活様式を教える「家政塾」を開き、西洋文化に憧れる若い女性の人気を得た。

洋風生活が浸透していく過程において、それらは一様に進展したのではなく、情報伝達の形式・速度、地域性、経済性、生活意識等その他諸々の要因を受けて



図1. 水戸でのエリザベス・ビンフォードと吉田清野

の時間差が認められる。その時間差を縮小させる要因の一つとして「洋風生活様式を紹介する人・教える人」の介在を考えることができる。

筆者は先に、「洋式生活を教えた人々—近江家政塾について—」²⁾と「同統報—エリザベス・ビンフォードから吉田清野へと引き継がれた洋風—」³⁾について発表し、近江ミッションの伝道活動に、生活面から活力を与えた清野をはじめとするミッションの女性達の理念や行動を考察し、ミッションの初期において関係の深かった水戸時代のビンフォード夫妻についてもふれてきた。さらに「家政塾」の果たした役割およびその時代的意義⁴⁾や、その教育が生徒達に与えた影響⁵⁾についての考察をしてきた。清野が結婚後、ほどなくミッションの指導的立場に推されたのも、夫・悦蔵の支援のみならず、彼女の経歴から培われた資質によるところが大きい。

本報告では、清野がその教育構想、実践活動において多くの指導を得たビンフォード夫妻の行動の記録をたどり、その伝道活動の様相を明らかにし、人々に生活向上の目を開かせた夫妻の生活指導や、夫妻の示した洋風生活がどのように人々に感受され、影響を及ぼしたのかについて考察を試みた。加えて同時代のアメリカの女性宣教師の来日事情についての研究*⁴⁾とも重ね合わせ論究を試みた。

*¹ アメリカ新教各派の伝道局は西欧諸国に先んじて日本に宣教師を送った。聖公会派のリギンス、ウィリアムが長崎に入り、前後して長老派のヘボン、ブラウン、シモンズが神奈川に、フルベッキが長崎に到着した。

*² 1880～1964, 1905（明治38）年YMCA派遣の英語教師として県立商業学校（現県立八幡商業高校）に赴任。2年後に解雇され、教え子であった吉田悦蔵と近江ミッションを設立。伝道資金調達のため輸入雑貨販売と建築設計の仕事を始め建築家としても成功をおさめた。

*³ 1890～1942, ヴォーリズの教え子として県立商業学校を1907（明治40）年3月に卒業。卒業と同時にヴォーリズと近江ミッションを設立。伝道活動はもとより、その後ミッションがヴォーリズ合名会社、近江セールス、近江兄弟社と拡大発展する中で、ヴォーリズの無二の協力者として経営面での手腕を発揮した。

*⁴ 女性宣教師来日の背景とその影響を本国アメリカの立場から研究したものに小檜山ルイ：『アメリカ婦人宣教師』、戸田徹子：アメリカにおける婦人外国伝道教会の成立、『アメリカ史研究10』がある。

2. 研究の資料と方法

水戸のビンフォード夫妻と、近江八幡の吉田清野の関係を明らかにする研究史料にあたっては、主には近江ミッション（後の近江兄弟社）発行の単行本、機関誌、教材、その他の文献を中心にしたものと、キリスト教友会（フレンド派・フレンド教会）関係の文献、普連土学園発行の単行本、機関誌などがある。それらを基盤に、さらにプロテスタント伝道に関する文献などとも合わせて事実関係を照合、検証作業を行った。

関係者へのインタビューも回を重ね、記憶回想の方法も採用した。

3. 宣教師ビンフォード夫妻の伝道活動

(1) ビンフォード夫妻の来日

ガーナー・ビンフォードは1865年インディアナ州ハンコックに生まれた。祖父母、父母共クエーカー教徒の宗教心溢れた家庭に育ち、高校卒業後カンザス州の公立学校で教鞭をとりながら、州立師範学校(Kansas State Normal School)を卒業した。幼い頃より海外伝道の道を希望していたが、1893(明治26)年にカナダのフレンド教会の推薦を受け、その年の11月に宣教師として来日した。彼の最初の日本滞在はこの年から1897(明治30)年末までの4年間で、主には青年伝道の任務が課せられていた。普連土女学校、聖愛学校*⁵などで英語と聖書を教え、また東京フレンド教会の事業に協力した。この間に日本語の習得にも熱心で日本人教師につき毎日の日課として日本語を学んだ。

1898(明治31)年年頭に任期を終えて帰国、しばらくロサンゼルスで過ごした後に各地で日本伝道の報告会を行った。翌年リッチモンドに移り、そこで彼は生涯の伴侶エリザベス・シュナイダー(Elizabeth Schneider)と出会う。エリザベスは1876年、リッチモンドの裕福な家具商の長女として生まれ、篤信な両親の希望によりただちにフレンド派のメンバーとして生得権が与えられた。1896年にリッチモンドのアーラムカレッジ(Earham College)の音楽科を卒業し、その後は公立学校で音楽と美術を教えながら教会や日曜学校でオルガニストとして奉仕していた。ビンフォードがリッチモンドの教会で行った日本伝道の講演はエリザベスの心に深く感動をよび起こし、遂には彼の片腕となって自らも海外伝道師として働く決心をするまでになった⁶⁾*⁶。2人は1899年6月に結婚、同時にエリザベスはカナダフレンド教会の婦人外国伝道宣

教会の一員に加えられ、ビンフォード夫妻はそろって日本で宣教に当たる新任命を受け、渡航が承認された。

1899(明治32)年10月10日夫妻はバンクーバーを出航し、24日に横浜に入港、東京に3週間滞在して仕事関係の準備を整え、さらに水戸では入手困難であろうと思われる家具や生活必需品を買いそろえた。幸運にも中古家具店で帰国したアメリカ人が残っていた生活用品を見つけることができ、これらとともに夫妻は水戸へと向かった。

(2) 伝道活動の足跡

1) 水戸時代(1899年11月~1920年11月)

水戸での最初の住居は、市内三の丸の士族屋敷で、10畳1室、4畳半2室、3畳2室の純日本家屋であった。総延長46mの廊下があり、玄関脇の4畳半には毎朝の雨戸の開閉をはじめ夫妻の日常の世話をする書生が住み込んでいた。この住居の印象についてガーナーは日本伝道回想録の中で、5ページにわたり詳細に記しているが、その中で詳述の理由を次のように記している。

I give this rather detailed description of our home because of the often asked question, "Do Japanese live in paper houses?"⁷⁾

度重なる無知な質問に対するガーナーによる日本住宅紹介でもあった。夫妻自身も地方の日本家屋に住む初めての経験だけに、とまどいながらもさまざまな工夫を試みたことがその中で記されている。たとえば、次のような点をあげている。

- ・椅子・食卓・ベッドの脚に板を渡して釘止めし、家具の脚が畳にくい込むのを防いだ。
- ・洋服を吊るすためにたんすの外側に棚を作り、パイプをとりつけた。
- ・日本家屋は開放的でパン生地をねかすための温度を一定に保つのが難しかった。そこで、炭火利用の保温庫を考案した。
- ・オープンが備わっていないことでの不便を解決するため板金屋に頼んで1斗缶の側面に穴を開け底に炭火皿を設けた簡易オープンを作らせた。これは料理教室を開き西洋料理を教える際に非常に役立った。
- ・水道が敷設されておらず、井戸を利用するしかなかったが、台所内に3斗入のかめを置き、井戸から水

*⁵ 1890(明治23)年東京麻布三河台に設立された男子教育、伝道者養成を目的にしたフレンド派の神学校。

*⁶ 1898年のガーナーの伝道報告会でエリザベスは神の啓示を受けたという。

を引き込んだ。

異郷における夫妻の生活は常に改善を重ねることであった。さらにそれらは後の農村生活改善への意欲とつながりをもつこととなった。

フレンド派が水戸に彼等を派遣し、また夫妻も水戸を伝道拠点に選んだのは、茨城県がことさらキリスト教にとっては未開の地であったことがあげられる。フレンド派の最初の宣教師コサンド（前出）も来日早々「水戸は旧水戸藩時代から排耶論の拠点でありキリスト教伝道にとってきわめて困難なところであった」⁸⁾ことを認めており、これに対処するため加藤万治⁷⁾がすでに水戸に派遣されていた⁸⁾。この加藤の存在も大きな支えであったが、布教に燃える宣教師にとって当地は大きな使命感発揚の地であった。

ビンフォード夫妻が水戸入りした日、1899（明治32）年11月14日には加藤一家総出の歓迎を受け夫妻の住居も定められた。

着任早々ガーナーはフレンド教会の集会や事業に全面協力し、特に学生を相手にした聖書研究に主力を注いだ。自宅に青年達を集めて聖書と英語を教え⁹⁾、そこからの収入は、後の教会堂建設の基金の一部となった。エリザベスは女性達に西洋料理を教えた。そのきっかけは、水戸入り早々に自宅に中学校の英語教師夫妻を招待したことからであった。エリザベスの作ったローストチキンのおいしさに感嘆をした教師夫妻は、西洋料理の手ほどきを受けたいと申し出た。その結果すぐに料理教室が開始された⁹⁾¹⁰⁾。生徒であった平川梅子は次のように回想している。「料理会は南町の板垣氏の離部屋で始められ、スポンジケーキというお菓子が教えられました。一中略—道具のない先生は玉子の泡立てなどにフォークを代用されました」¹⁰⁾（原文のまま）。また中村かつは次のように回想している。「—前略—週日に西洋料理のお稽古があってそのお仲間に入り御夫人より講習を受けました。今思い出されますのは食パンの製法、ピフテッキ、オムレット、スポンジケーキ、ジンジャーケーキ、ペンケークス、ドーナツ、イチゴ、ブドウ、イチジクジャムなどお手際は素人ばなれ、いろいろとご親切に教え下さいました—後略—」¹¹⁾（原文のまま）。料理を教えるに当たって言葉の違いはさほど障害にはならなかったが、苦心したのは計量法の違いであった。水戸では入手困難な食材、日本の台所設備を考慮して臨機応変にこたえ、料理教室は順調に発展した。料理教室でのレシピは横浜キリスト教系の月刊機関誌『常盤』¹¹⁾に連載執筆され、さ

らに1904（明治37）年には、それらはまとめられて単行本『常盤西洋料理』が出版された¹²⁾。その内容にはパン、マフィン類、ケーキ・デザート類から卵、魚、肉、野菜などを素材別に分類した約300点のレシピが簡潔明瞭に記され、また同時に献立法、健康管理上の主婦の心得、栄養学の知識、病人食、家庭看護法などが書かれている。

月刊誌の方には西洋料理のみならず、洋裁、西洋洗濯法、アイロンの掛け方、道具の整え方、収納の仕方などの執筆も行った¹²⁾¹³⁾。

エリザベスの助力者の中でも、後に近江八幡の吉田悦蔵夫人となる渡辺清野は、最も長く奉仕活動を共に

⁷⁾ 1855～1932、医者になることを目指したが29歳の時にキリスト教に入信し、1894（明治27）年に水戸に入り翌年、水戸キリスト友会伝道主任となる。平和運動の中心的存在として明治大正の水戸宗教界に大きな足跡を残した。

⁸⁾ 佐々木⁸⁾ p. 108によると1894年10月コサンド宅でコサンド、ガントリー、ビンフォード（1回目の独身時代の滞日中）、加藤万治他の9名が集まり伝道委員会が組織され、各地の伝道主任が決められた。加藤は水戸への赴任が決まった。

⁹⁾ Binford⁶⁾ p. 93には1899年の水戸入り直後から水戸滞在中三つの聖書研究会をもっていたと記録される。中学校の生徒クラスと師範学校の生徒クラスは週に2回開かれ、社会人向けには日曜の早朝が当てられた。

¹⁰⁾ 中学校教師の申し出を受け水戸に来てただちに始まった料理会の参加者は弁護士、判事、役人等の夫人達で夫達は反対はしなかった。料理会の開始時期に関しては¹²⁾にて詳述。

¹¹⁾ 1890（明治23）年に来日した宣教師ボークスは、1897（明治30）年に横浜で常盤社を設立。翌年から婦人子ども向けの月刊誌『常盤』を発行。1923（大正12）年に関東大地震の直撃を受け廃刊。

¹²⁾ エリザベス著による『常盤西洋料理・Tokiwa Cook Book』は横浜常盤社より1904（明治37）年12月初版発行、その後幾度か再版され1925（大正14）に5版が発行されている。この序によるとエリザベスは26年間にわたって西洋料理を教え、最初の4年間の記事をこの本にまとめた¹²⁾とある。水戸入り早々から26年後の1926年頃は下妻小友幼稚園が計画された頃である。エリザベスの料理教室は、水戸入りの直後から下妻宣教師館でも続けられた。また日本人にとって洋式計量を理解するのは難しいとして、記述は匆、合の日本の計量法を採用したと記す。

¹³⁾ 柿岡三郎によると西洋洗濯の方法は料理とともに『常盤』にその内容が毎月執筆された¹³⁾と記される。また清水¹³⁾には西洋料理、西洋洗濯の講習が開かれたと記される。

明治・大正・昭和初期における来日宣教師の活動にみる生活洋風化への影響

し、エリザベスの伝道方法、慈善活動を実質的に支えた。後に近江八幡での清野の実践活動の下地はこの時代に多くが蓄積された。この頃の清野は普連土女学校を卒業し、さらに横浜の聖經女学校^{*14}を終えたばかりの20代初めの活みなぎる頃であった。

ビンフォード夫妻が水戸に来て12年目の1911(明治44)年8月に念願の水戸友会教会堂が内外の寄付を集めて備前町に竣工した^{14)*15}。煉瓦造の小規模な建物であるが当時の様子を語る稀有な建築物である^{*16}。内部は大集会室1室と小集会室2室があり、戦災を受け屋根部分は焼け落ちたが修復されて、戦後は少友幼稚園園舎として使われてきている。現在でも屋根以外の本体は当時の姿をとどめており夫妻の水戸における業績の最大のものとして評価されている。

1912(大正1)年6月夫妻は休暇のため日本を後にする。ロンドンのフレンド派の本部に6週間滞在したが、この時に夫妻はサイドカー付オートバイを購入する資金を得た。さらに、フィラデルフィアでは天幕伝道のためのテント代を調達することができた。1913(大正2)年の年末に水戸に戻り、再び伝道を開始した時には妻をサイドカーに乗せてオートバイを運転するガーネーの姿が見られるようになった。

伝道天幕の大きさは7.2m×10.8mで最大収容時には200名を超えることもあった。ガーネー自ら大きな太鼓を叩いて宣伝に努め、参加者を募り1カ所に1週間から10日間滞在して天幕講演会を開いた(図2)。農村の祭礼の賑わいを利用し、その前日から付近に天幕を張りキリスト教の福音を伝え、夫妻は天幕の片隅の仮設ベッドで寝泊まりした。人々が喜んだのは、講演会後に出されるエリザベスが用意した西洋料理の振る舞い料理であった。説教者も聴衆



図2. ビンフォード夫妻の天幕伝道

も食事を共にすることで相互理解や親睦を深め、信者を増やすことに役立った。この天幕伝道は1915(大正4)年から1920(大正9)年の5年間に県下の高萩、田崎、大貫、小川、村田、岩瀬、下館、磯濱、大谷川、湊、高濱、宍戸、前濱の13カ所で開かれ¹⁵⁾、1日に数回のこともあった。ガーネーの記録では合計39回開かれたとしている¹⁶⁾。

2) 下妻時代(1922年6月～1936年11月)

1920(大正9)年11月に夫妻は休暇をとり、一時帰国の途についた。それ以前に友会本部の伝道政策に従い、拠点の水戸から下妻へと移す計画がなされた。下妻は当時人口5,000人程度のキリスト教の及ばぬ小さな町にすぎなかったが、ひととおりの行政施設が整い特に中学校があったことが新しい赴任先の選択条件になった。

休暇が明けて1922(大正11)年6月下旬に日本に戻り下妻の住居が定まるまでの夏の間軽井沢で過ごした。10月に下妻に入り、西町の古い半ば荒廃した民家を借りて、夫妻の新しい生活が始まった。

翌1923(大正12)年6月に、現在の下妻乙に下妻宣教師館^{*17}が竣工した^{17)*18}(図3)。木造2階建て建築面積130m²弱のこの宣教師館は、正面玄関や畳の部屋に日本住居の姿をとどめてはいるが、全体は西洋館として建てられている。実測調査の結果、柱間1間は1,820mmで、在来工法の尺寸法によって建設

*14 1884(明治17)年アメリカ、メソジスト監督教会婦人宣教師ヴァン・ペテンによって横浜に設立された婦人伝道師養成学校。後に日本女子神学校に発展解消、さらに青山学院神学部へ吸収され、その女子部となった。

*15 亀山仙次郎によるとカナダ友会より500ドルを得て200余坪の土地を購入、さらに片野の寄付4,000円あまりを得て資金とした。

*16 建築面積約145m²。戦災を受けた後、1925(大正14)年に天王町に創立された少友幼稚園が、同所に移転し現在に至っている。

*17 日本建築学会編『新版 日本近代建築総覧』(1980)によるとこれを下妻基督教会・ヴォーリズ設計と記している。しかし、角谷三郎編著『愛は長久も』(1949)では当該建物は下妻宣教師館と明記されており、ここでは後者を記す。また、ヴォーリズの建築研究の碩学、山形政昭はこれをヴォーリズの設計としていない。平面図は著者が現地実測の上1998年8月に作成したものである。

*18 敷地は下妻の篤志家・鈴木家所有の畑地を借り受けた。また、角谷¹⁷⁾p.76には借地契約期間は99年間とある。

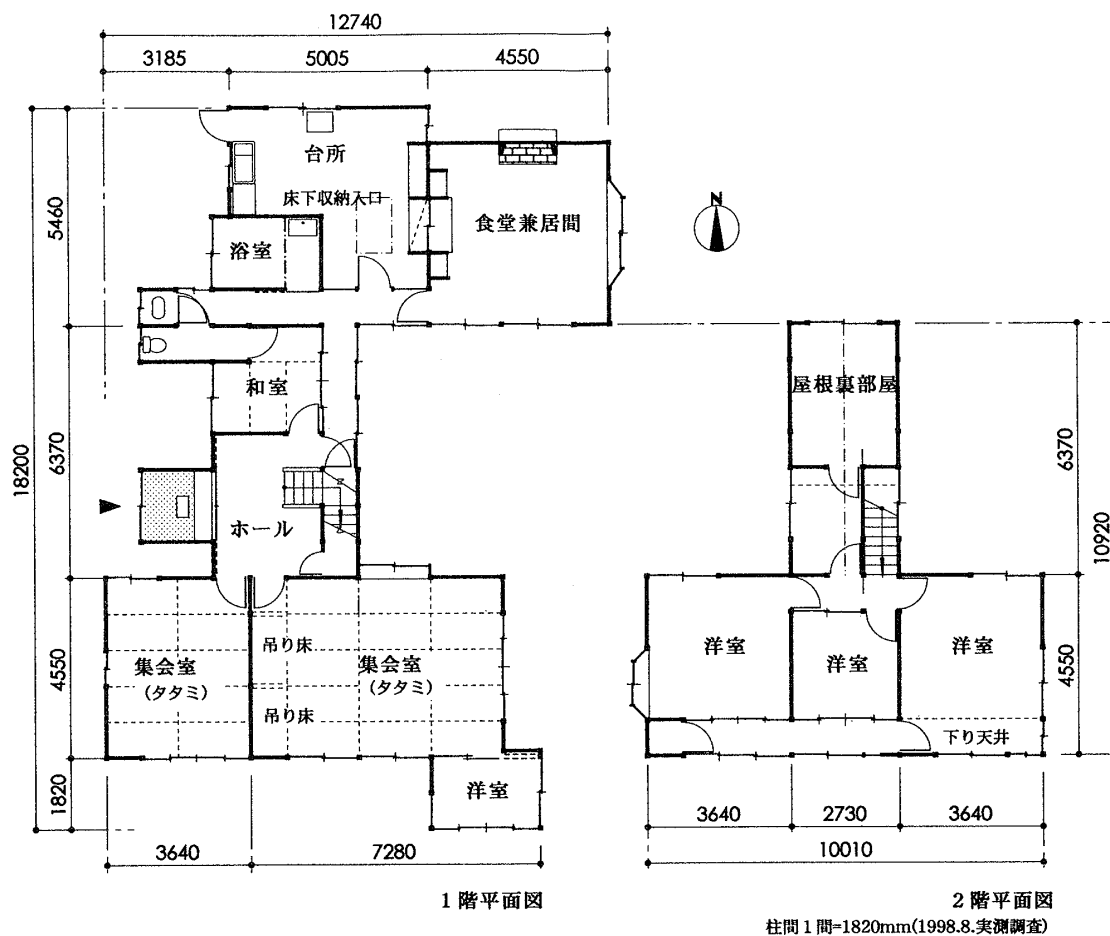


図3. 下妻宣教師館平面図

されている。簡素ながらも高潔な品位が漂い夫妻の手柄がしのばれる建物で、建具の交換がなされた以外は当時のままの原形を残して、現在は下妻友会の集会所として使用されている。夫妻は7月に旧居から移転し、その後定年退職により離日するまでの14年間、ここを住まいとした。

宣教師館の周囲にはエリザベスが丹精して育てた花が咲き乱れ、その花々は食卓を飾り、病人を見舞う際に大きな役目を果たした^{*19}。ガーナーが集会を始め、バイブルクラスを設けて同時に英語を教えるなど青年男子の感化・教化を主としたのに対し、エリザベスは女性達を集めて宣教師館で西洋料理や手芸、編物を教え、音楽、ピアノの手ほどきをした。古い習慣、伝統的生活規範が根強く残るこの地において、夫妻の態度に最初は警戒心をもっていた人々も、夫妻の隔てのない温かい心にふれ、夫妻の住まいを訪れるようになった。住まいを開放し、実際の暮らしぶりや室内の光景を見せることで西洋文化への憧れの気持ちを湧き立たせ、人々の生活向上意欲に刺激を与えた。夫妻の居館

を訪ねた久布白落實はその室内光景に対する羨望を次のように言っている¹⁹⁾。「食堂から客間にかけて隙間なくじゅうたんや諸道具や、本箱やテーブルが居心地よく配置されて何とも云えぬ豊かなホームという感じの中に一中略一接待されている自分は何と幸福であったか、茨城県下妻のあの宣教師館を今懐かしく思い浮べる」というような宣教師の暮らしぶりは洋風の生活様式概念に具体性を与え、当時の欧米の進歩的文化を実感させるものであった。

1927(昭和2)年10月にエリザベス自らが設計をした小友幼稚園が竣工した。以前から自宅に子どもを集めてはお話し会などを催していたが、次第に人数が増えたため新しい園舎が必要となった。町の支援者の好意を受け^{20)*20}、新築された宣教師館のすぐ近くに

*19 角谷¹⁸⁾には宣教師館前庭は常時花が咲き乱れ、その花を持って近在の病院見舞いをしたと記される。前出の清水¹³⁾p.24には宣教師館の花々の美しさ、病人見舞いのことが記されている。

*20 夫妻の下妻の最初の住居の所有者石井家の畑地を幼稚園の敷地として借り受けたと記されている。

明治・大正・昭和初期における来日宣教師の活動にみる生活洋風化への影響

檜皮葺の屋根、杉皮の外壁で覆われたコテージ風の下妻小友幼稚園^{*21}の園舎が完成した。定員30名のところ初年度は27名の園児が入園したが、経費不足の状態は免れなかった。一方で母の会を結成し園児の家庭での躾などの生活指導、手洗い、清潔、伝染病予防などの衛生指導を充実させるとともに^{21)*22}、東京から前田多聞（東京市助役）、根本 正（社会運動家、参議院議員）、久布白落實（キリスト教婦人矯風会会頭）、ガントレット恒（同前会頭）、高良とみ（社会運動家、参議院議員）、など高名な講師をたびたび招いて講演会を行い²²⁾母親の教養を培った。地方の1町村でありながら先進の話聞けるとあって評判は高まったが、経済的には恵まれぬ状況は続いた。時にはバザーを開き、手作りのクッキー、ドーナツ、ココアを売り、経費を捻出しつつ、宗教的情操の養成を目的とした幼児教育の重要性を唱えた。

4. 伝道と生活改善

(1) 農村伝道

下妻で伝道活動を開始して6年目、水戸時代のバイブルクラスの教え子菊地柳平が夫妻の前に現れた。菊地は小学校の校長となっていたがその職を捨ててキリスト教による農村青年指導を試みようとしていた。1928（昭和3）年、夫妻は休暇帰米を機にロサンゼルスで開かれた世界日曜学校大会に出席予定をしており、これに菊地を同行させた。約3カ月間アメリカで農村生活の実情を視察した後夫妻共々下妻に戻った菊地は、その後賀川豊彦^{*23}の実践に学び教示を得て同じ志をもつ協力者とともに農村伝道に本格的に乗り出すこととなった。

菊地等の奔走により1929（昭和4）年1月に「農村青年修養会」が結成された。県下の弓馬田、下妻、下館、水戸、石岡の5カ所のフレンド教会を会場にして農家の後継者、それも18～25歳の青年で実際に農作業に従事している者を集めての出発であった。ピンフォード夫妻もこれに全面的に協力援助した。農村生活についての課題を論議し、新しい農村経営を展開することは、旧弊な人間関係の中で障害も多く表出させたが、その一つに宗教の問題があった。農村青年修養会の目指すところは先進の西洋諸国の農家経営を学ぶことと、さらに近代西洋を範として家庭生活を改革することであった。その達成にはキリスト教の倫理、理念が不可欠であった。周囲と軋轢が生じて、世襲に束縛され封建性や伝統と近代化に悩む農家の長男達にと

って農村修養会の活動は一筋の光明であった。修養会はほぼ10日間を1期間としていたが、その後も継続して定期的に行われることを望む修養会修了生達によって「新生会」が組織された^{23)24)*24}。当時日本の金融経済は破局的段階にあり、農村経済の下落は甚だしく政府は農村復興として備荒貯蓄や自力更生を唱えていた。このような状況下において新しい価値観を求め、自ら意識改革をしなければならぬという意識はフレンド教会の政策と重なった。新生会の運動は農村協同組合をつくり共同使用の農業機械・器具を購入する相互扶助の方法を取り入れ、貯金を奨励し、酪農を行うなど、理論と実際行動において農村の文化と生活の向上ならびに精神の清廉性高揚に大きく貢献した。この農村再建事業の成果により新生会のメンバーの何人かは技術力、指導力が認められて茨城県が組織化を図った県下の青年団のリーダーに招聘された²⁵⁾。

茨城県連合新生会第1回総会が1935（昭和10）年10月に開かれ参加した者は100名を超えた。次年度には150名となり、ガーネーは引退離日を前にしてこの発展ぶりに非常に感激をし²⁵⁾、茨城伝道の最大なる目的実現と認めて日本での37年間の伝道生活に終止符を打った。1936（昭和11）年11月夫妻は横浜港を出航し帰国の途についた。

(2) 住生活の改善指導

夫妻は家の中では日本人にならない靴を脱いで暮らしたが、起居様式に関しては、彼ら本来の洋風の生活を続け、それらの実際を人々に示して生活改善を奨励した。

水戸ではまず第一にキリスト教の広宣を最大の目標に掲げて、人々の関心を喚起させるためガーネーは英語を、エリザベスは西洋料理や家事を教えて西洋文化の紹介と共に福音を伝えた。それに対して下妻では、宣教師館の建物自体を利用して、実際的な生活指導を行い、宣教師としての指導力が発揮された。

*21 1927（昭和2）年11月16日茨城県知事認可。1992年（平成4）年旧園舎は解体され現在は同所に新園舎が建設されている。

*22 岡 きよによると産後の母子の栄養指導、育児指導、年間の衣類計画の指導を受けた。また規律、整頓、清潔の習慣を幼児のうちから始めるべしと教えられたとしている。

*23 1888～1960、キリスト教社会運動家。神戸の貧民窟の伝道を始めとして各種の社会事業に尽くした。

*24 ニコルソン²⁴⁾年譜には1930年から新生会運動を行ったと記されている。

1923 (大正 12) 年下妻宣教師館が完成した (*17 参照)。平面は集会堂として使用する部分と夫妻の生活部分とが和風と洋風に明確に区分されている。衛生面に関しては強く改善を唱え、宣教師館にその意識を反映させ来訪者には次のような説明をしたという *25。

- ・台所のレンジの上には鉄板でフードを設け、排気排煙の重要なことを示した。
- ・家族共用の手拭い使用を改め個人別使用を奨励した。
- ・窓に網戸を設けた。特に台所には細心の配慮をし、外周はもちろん廊下側からの出入口にも網戸を設け、蠅の進入を防いだ。
- ・蠅については諸病の原因として憂慮した。汲み取り便所の非衛生さを指摘し便器の蓋を考案して設け蠅の室内進入を防いだ。
- ・室内の明るさ、通風確保のため、各室とも窓の配置、大きさを配慮した。

外壁下見板は明るい肌色、窓枠・建具は水色のペンキに塗り分けられ、屋根は銅板平葺き、ガラスのはめ殺し窓、上げ下げ窓を備えた外観は下妻近辺では珍しく宣教師館を見学に来る人も多かった。家具のほとんどは日本の指物大工を指導して作らせた。クエーカー教徒として禁酒運動に取り組み、作業療法として家具製作を導入した。その結果アル中患者を更生させる過程で仕上がった家具の数々が今もそのままの状態で宣教師館の雰囲気を高めている。宣教師館を訪れる人にはどんな用向きであれ夫妻は手厚くもてなし、住まいの内部を見せて清潔で合理的家庭運営の実際を見せた。角谷 (前出) のビンフォード夫妻の回想録第 2 篇には夫妻ゆかりの 62 名の回想が記載されている。その中から住生活の印象に関する記述を見ると以下のような事柄が収録されている。() 内は執筆者名。

- ・家の周囲に花を育て、その花で人の心に潤いを与

え、生活を美しくする態度に教示を得た (河井・瀧池・山田)。

- ・本箱・テーブルなどの洋家具調度品の配置から生活の豊かさを感じた (久布田・山田)。
- ・夫妻の美しい住まいと楽しい料理や編み物の講習会にひかれた (高良)。
- ・ファイヤープレイスの前のがっしりしたケヤキの大テーブルは威風堂々、見るからに羨ましい逸物であった (小塩)。
- ・ピアノとストーブと台所とバターの臭い (細谷)。
- ・規律、整頓、清潔の習慣は幼児の頃から始めること (岡)。
- ・消化器伝染病は家庭の台所からという事を強調し、衛生上の改善を唱えた (石濱)。
- ・夫妻の住まいをよく訪問し、その時は必ず夫人のケーキやコーヒーでもてなされた (伊澤)。
- ・南向きの夫人の小部屋で編物を教わり、アメリカの風習を聞いた (中山)。
- ・風呂の中に手拭いを入れないこと、電灯を消すこと、便所の使い方、食事の作法など家庭生活の中での教養が高められた (飯田)。
- ・女学生の頃夫妻の住まいが珍しく毎日見に通い、同時に聖書を教わった (瀧池・猪瀬)。
- ・夫人の描いた絵が飾られ、硝子棚には古雅な珍しい瀬戸物が配されて、アメリカの室内を感じさせた (山田)。
- ・クリスマスの装飾は美しく印象的であった。プレゼントの作り方、並べ方、ツリーの立て方、雪の作り方などを初めて知った (多数)。

以上を通して伝わるものは、宣教師としての慈愛に満ちた態度と洋風生活の暮らし方の実地指導、すなわち自宅に人々を招き生活向上の関心を養おうとする姿勢である。

一方、新生会活動は実際の農家改造指導にも意欲をみせた。屋内に煙が充満し非衛生、非効率的なかまどを改め、煙突を設けて炊口に工夫を凝らし、熱効果と室内環境に改善をもたらした。また五右衛門風呂の設置を奨励した。農家に多くある廃棄物を燃料として使い余熱効果も大きい五右衛門風呂の普及を促した。また井戸に蓋をして動力ポンプを据えること、台所を常に清潔にする心掛けなどが指導された *26。しかし 1930 年代になると不穏な世界情勢は軍国主義を強化させ、各地の外国人宣教師達の活動を著しく阻止することとなった。ビンフォード夫妻の後を引き継いで水

*25 宣教師館実測には茨城県教育庁文化課井坂氏、加藤万治の長男加藤敬愛の長女加藤礼子氏 (水戸キリスト友会) が同行。当時の宣教師館の使用状況については現在下妻宣教師館の管理責任者で、小友幼稚園園長でもある福西 基氏 (下妻キリスト友会) から説明を受けた。福西氏は夫妻が下妻に来た当時から教導を受け新生会運動にも参加した。

*26 福西 基 (前述)、菊地勝子両氏からの聴取による。菊地氏 (下妻キリスト友会) は菊地柳平の五女で現在普連土学園評議員。

明治・大正・昭和初期における来日宣教師の活動にみる生活洋風化への影響

戸で活動し、新生会活動にも参加したニコルソン^{*27}のもとにも刑事がつき思想調査をするなど県下の新生会自体の存続も危機を迎えるに及んだ。したがって、農家改造の目的を達成するには戦後の動きを待たざるを得なかった^{*28}。

(3) 女性宣教師の遺産

アメリカの海外伝道活動の歴史から俯瞰すると、1899（明治32）年に2人そろってピンフォード夫妻が来日した時期は第2期に当たっていた^{*29}。またヴォーリズを近江八幡に送り出したYMCAの海外教師派遣運動においても1900年からは第2期を迎えていた²⁷⁾。両者の海外伝道計画はともに共通して第1期は都市部中心に行われ、第2期は地方へと拡大し、プロテスタント伝道は、明治後半には各地で独自の根を下ろした。

近代化、南北戦争などを通してキリスト教会が支援したアメリカの女性の社会活動は、慈善的、博愛的、道徳的な規範を求めつつ女性の力を全国的に組織化させ、さらに政治性を強めていった。女性宣教師はこの動向の中から当時のアメリカの女性領域文化、すなわち衣食住にわたる家庭内生産、家族奉仕、家庭運営の知識・技術をもって生活のあるべき姿を具体的に派遣先の人々に示す役目を担いつつ、海外へと送り出されたのであった²⁸⁾。1900年時点でみると、日本に派遣され活動をしていた宣教師は、主にアメリカからの派遣であるがその総数は527名、その中の3分の2に当たる327名が女性宣教師であった²⁹⁾。それほど女性宣教師が日本伝道に関心を払った理由を小檜山は次のように言及している。「西洋文化の吸収と自己研鑽に積極的な、真面目で教え易い少女達に囲まれた婦人宣教師は、その様々な困難にもかかわらず、比較的容易に仕事に着手し、それを拡大・発展させることができた。国際的に見て、日本の婦人宣教師の割合が高かった理由の一つは、明らかに彼女達の仕事が順調に発展したことであった。」³⁰⁾

第1期の女性宣教師達が、今日のキリスト教系大学の基礎を作り、大きな足跡を残したのに対し、2期目の女性宣教師達は、エリザベスを例として多くは宣教師の夫と結婚し、夫と行動を共にしての来日であった。男性宣教師が聖書の翻訳や神学教育に重点をおいて布教を試みたのに対して、女性宣教師達の多くは、いわば生活文化の伝道を布教の手段とした。

宣教師のライフスタイル全般を体得させんがために効果的と考えたのは生活環境であった。生活環境が与

える教化の重要性に着目した宣教師達が、ことさら洋風生活様式を維持したのも自他共に望んだことであった。自分達の住まいを教場にして衣・食・住の洋風生活の実際を見せ、キリスト教の感化に結びつけるという伝道の有様は文明伝播的であった。

8年間あまり水戸のエリザベスのもとで働き、クエーカー教徒としての生き方や伝道活動の方法を学んだ清野の資質は、近江八幡でその真価を発揮していった。清野は、自宅に備わるアメリカ直輸入の設備、調理機器を利用して^{*30}西洋料理の教室を開いた。後の1933（昭和8）年には、その料理教室は、料理のみならず家事一般、語学、音楽、美術、一般教養を教える「家政塾」と発展し、ミッションの教育事業の一端を担うまでになった。吉田邸を含むヴォーリズ設計の住宅群^{*31}は周囲の古い町並みの中で一極精彩を放ち、先進文化に憧れ、流行に敏感な若い女性の心をひきつけた。女学校で近代教育を受け、大正期の進歩的な思潮を知った若い女性達は、吉田邸をモデルに自分達のこれからの家庭に夢を描いた^{*32}。

エリザベスの実践した伝道活動、その方法は清野という運び手を得て時空を超えて近江八幡の地で新たな成果を生むこととなった。そこには環境すなわち住宅様式がより効果的に作用した教化の実際をみることができる。また同時に、キリスト教精神による生活の近代化と民主化、住生活の洋風化が同一方向性をもって

*27 1892～1983、アメリカ人宣教師。1915年来日、1939年帰国。戦後再来日、食料難の時代に山羊の飼育で子ども達に乳を供給したことで有名。

*28 角谷²³⁾によると戦後数年して弓馬田を中心に新生会が復興したとある。都市部の住宅復興政策が進展する一方で1948（昭和23）年農林省に生活改善課が設置され、その指導のもとに農家改善が行われたがその方法、技術はかつての新生会が指導実践したものと重なった。

*29 小檜山²⁶⁾によると日本でのプロテスタント諸派の伝道活動を1859年から明治初期の20年間を第1期としている。

*30 1910（明治43）年に設立されたヴォーリズ合名会社は、建築設計業とともにアメリカから建材、建築金物、設備機器、家具調度品、楽器の輸入販売を行った。ミッションの住宅群にはそれらが備えられた。

*31 池田町には1913（大正2）年の吉田邸をはじめ次々にヴォーリズの設計による洋風住宅が建てられその一角は洋風住宅街として今も名所となっている。

*32 川崎⁵⁾では家政塾に学んだ生徒達が、その成果としてどのようなことを自分達の家庭生活に活用したのかを考察した。

展開された一過程を認めることができる。

5. おわりに

住生活の洋風化は時代の必然性の中で進行したが、そこにはいくつかの過程が考えられよう。上流階級に独占されていた西洋文化が中産階級の台頭とともに下方に流れてきた状況、あるいはマスメディアの発達による情報伝達^{*33}、各種団体による啓蒙運動^{*34}によることも大きい。と同時に各地で草の根的に活動したキリスト教宣教師達の伝道および生活指導から影響を受けた例も少なくない。

その一例として本研究では茨城県下で布教活動をしたビンフォード夫妻に着目した。特に下妻時代の夫妻の活動は、洋風生活浸透の萌芽の過程を考察する上で意義深い。夫妻は、自分達の住居であった下妻宣教師館を広く開放し、洋風の生活様式の知識のない者に、設備機器の設置や使用法、家具の配置・使用法、室内装飾、衛生管理などの実際例を見せ、住宅のあり方、住まい方を実物をもって教えた。また、家事、西洋料理、食卓作法、生活の美化、清潔の習慣などの日常生活態度を教えるにも、自分達の生活をそのままモデルとした。前述の夫妻についての回想録で明らかにしたように、旧来の日本人の家庭・住居とは異なる生活光景は多くの人の羨望を集めた。また夫妻の言動や行動から、西洋文化の先進性を感じとった人々は、洋風生活への憧憬を強めた。

それらの憧憬が実生活に取り込まれ、洋風生活が普遍化、一般化するには、ビンフォード夫妻のような「洋風生活を教える人」の存在が、その推進を促す役割を果たしたと考えられる。本研究ではビンフォード夫妻を例証にしたが、その時代と前後して来日した宣教師の活動が、わが国の生活の近代化、洋風化に貢献をした事例はこの他にも多く認められる。これらについては今後の課題としてさらに事例検証を重ねたい。

^{*33} 明治後半より刊行された『婦人之友』『婦人公論』『主婦の友』を始めとする多くの婦人雑誌は新しい時代に生きる女性のモラル形成に大きな役割を果たすと同時に、衣・食・住にわたる洋風様式の実用的知識の供給源として大きな影響力をもった。

^{*34} 大正初期の文部省指導の「生活改善展覧会」「生活改善同盟会」、農商務省支援の「世帯の会」、東京府による「平和記念東京博覧会」を始めとして新聞社、建築家による啓蒙が活発となった。

本報告にあたり、水戸、下妻での調査に大きな支援を頂いた茨城県教育庁文化課の井坂直樹氏、ならびに面談に際しビンフォード夫妻とゆかりの深い方々の多くのご協力を頂きましたことに深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 重久篤太郎：『お雇い外国人 ⑤ 教育宗教』、鹿島出版会、東京、46-49 (1968)
- 2) 川崎衿子：洋式生活を教えた人々—近江家政塾について—、文教大女短大紀要、**34**、1-14 (1990)
- 3) 川崎衿子：洋式生活を教えた人々(続報)—エリザベスビンフォードから吉田清野へと引き継がれた洋風—、文教大女短大紀要、**35**、71-81 (1991)
- 4) 川崎衿子：住生活の近代化と洋式生活導入の一過程・近江家政塾について、『生活学 1994』、ドメス出版、東京、47-71 (1994)
- 5) 川崎衿子：住生活の近代化と洋式生活導入の一過程(続報) 近江家政塾が伝えた西洋文化、『生活学 1997』、ドメス出版、東京、31-50 (1997)
- 6) Binford, G.: *As I Remember It 43 Years in Japan*, Friend Book Store, California, 70-75 (1950)
- 7) Binford, G.: *As I Remember It 43 Years in Japan*, Friend Book Store, California, 78-82 (1950)
- 8) 佐々木敏二：明治20年代の平和運動(1)—日本平和会書記 加藤万治小論—、同志社大学人文科学研究会キリスト教社会問題研究、**30**、80-111 (1982)
- 9) Binford, G.: *As I Remember It 43 Years in Japan*, Friend Book Store, California, 88-89 (1950)
- 10) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、桜美林出版部、東京、43-44 (1949)
- 11) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、桜美林出版部、東京、49-51 (1949)
- 12) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、桜美林出版部、東京、49 (1949)
- 13) 清水安三：『愛のかけ橋ミセス・ビンフォードの生涯』、桜美林出版部、東京、28-29 (1949)
- 14) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、桜美林出版部、東京、60 (1949)
- 15) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第1篇、桜美林出版部、東京、29 (1949)
- 16) Binford, G.: *As I Remember It 43 Years in Japan*, Friend Book Store, California, 188 (1950)
- 17) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、69、76 (1949)
- 18) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、26 (河井道子)、145 (山田春道) (1949)
- 19) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、29 (1949)
- 20) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道40年』、第2篇、76 (1949)
- 21) 角谷三郎：『愛は長久も—ビンフォード先生日本伝道

明治・大正・昭和初期における来日宣教師の活動にみる生活洋風化への影響

- 40年』, 第2篇, 70 (1949)
- 22) 角谷三郎:『愛は長久もーピンフォールド先生日本伝道40年』, 第2篇, 83 (河合芳雄), 92 (見澤光子) (1949)
- 23) 角谷三郎:『愛は長久もーピンフォールド先生日本伝道40年』, 第1篇, 36 (1949)
- 24) ニコルソン, H.:『やぎの大使』, 木魂社, 東京, 232-235 (1990)
- 25) Binford, G.: *As I Remember It 43 Years in Japan*, Friend Book Store, California, 210 (1950)
- 26) 小檜山ルイ:『アメリカの婦人宣教師』, 東京大学出版会, 東京, 183-212 (1992)
- 27) 重久篤太郎:『明治文化と西洋人』, 思文閣出版, 京都, 16-17 (1987)
- 28) 小檜山ルイ:『アメリカの婦人宣教師』, 東京大学出版会, 東京, 56-57 (1992)
- 29) 小檜山ルイ:『アメリカの婦人宣教師』, 東京大学出版会, 東京, 20 (1992)
- 30) 小檜山ルイ:『アメリカの婦人宣教師』, 東京大学出版会, 東京, 267 (1992)